

美羽会50年
想・出づり



序



美羽会は昭和41年に羽衣学園短期大学1期生が卒業する際、高津久次初代学長の助言で「卒業生の運営による同窓会」として設立されました。

その後、母校が男女共学、羽衣国際大学設立、短大の改組転換へと大きく変化しましたが、第四代美羽会会長のもと、卒業生や学園の方々のご尽力により今日まで活動が続けることができました。同窓会の役割も会員・学園の情報発信や懇親の目的だけでなく、母校・在学生への支援、地域貢献等と大学同窓会として多様に拡大しています。

この記念誌は、美羽会設立50周年を記念したものですが、恩師と共に築いた歴史の一つ一つを丁寧に写真でわかりやすく綴っており、単なる記念誌に留まらず、母校と共に歩んで参りました同窓会をひも解く「事典」のような存在になるよう作成しました。

いつまでもおそばに置いて頂き、おりおりを開いて下さることを願っております。



目 次

・序	1
・学歌・賛歌	2
・目次	3
《短期大学と大学ヒストリー》	
・羽衣学園短期大学誕生ヒストリー	4
・羽衣国際大学設立ヒストリー	5
《歴代学長》	
・羽衣学園短期大学	6
・羽衣国際大学	7
《挨拶》	
・会長 濱下恭子	8
《祝 辞》	
・学校法人羽衣学園理事長 松井基純	9
・羽衣国際大学学長 岸本幸臣	9
・学校法人羽衣学園学術文化顧問 川淵三郎	10
・学校法人羽衣学園学術文化顧問 辰巳満次郎	11
・学園・大学・恩師・関係団体	12～29
《50周年アニバーサリー》	
・50周年アニバーサリー 春・秋	30～43
・50周年アニバーサリー 美羽会特別表彰	44
・アニバーサリーイヤー大学トピックス 放送メディア映像学科オムニバスドラマ「阪堺電車」	45
人間生活学部 開設10周年	46
《美羽会の歩み》	
・会報美羽	47～58
・年間行事	59
・記念パーティ	60～64
・美羽 WAVE	65～67
・遊空間であいましょう	68
・ホームカミングデー	69
・美羽の集い	70～77
・留学生支援	78～83

《学生時代の思い出》

・入学式・卒業式	84～87
・謝恩会・卒業パーティ	88～91
・卒業旅行（短大）	92
・研修旅行（短大）	93
・海外研修（四大）	94
・海外ボランティア（四大）	95
・先生と私達（短大）	96～101
・心に残る先生の授業や言葉（短大）	102～108
・先生と私達（四大）	109～112
・心に残る先生の授業や言葉（四大）	113～114
・学友会・大学祭	115～117
・クラブサークルの思い出	118～127
・Shun 旬	128～133
・恩師へ 友へ	134～140
・思いのままに	141

《新評議委員》

新評議委員からのメッセージ	142～143
---------------	---------

《寄 付》

美羽会から母校へ	144
皆様から美羽会へ	145～147

《名 簿》

美羽会役員・H27年評議員名簿	148
・歴代役員名簿	149
・理事・会報委員・顧問・相談役名簿	150
・学園・大学教員名簿	151
・保護者会・親羽会役員名簿	152

《編集後記》

・編集後記・謝辞	153～154
----------	---------

表紙題字

羽衣学園高等学校教諭
野口 賢治 先生

短期大学誕生ヒストリー

私達が知らなかった母校誕生のお話を
発掘しました。

座談会 創設期の短期大学

出席者(敬称略)

高津 久次 (元理事長・学長)

佐藤 文治 (元中高校長・理事・短大名誉教授)

河村 卓 (元中高校長・理事・短大教授)

村木 実 (元副理事長・短大教授)

司 会

大久保 荘太郎 (元短大名誉教授)



高津久次先生



佐藤文治先生



河村 卓先生



村木 実先生



大久保荘太郎先生

大久保 本学創設時前後の経緯につき、各先生方の御旧話を承わり、今後の大学史の一部資料にもいたたく存じます。創設10年目の今日、建学の精神に立ち帰り、教育上、施設上はもとより、万般にわたる今後の諸問題に示唆を賜わりたく存じます。まず短大創設の必要性に関して、資金面、運営面などの確然たる見通しの上で、いつ頃から真剣な問題の取り組みが始められたのでしょうか。

佐藤 大学進学者の増加に伴い、かねての希望が実現可能と判断したのは昭和37年4月であります。

河村 高等学校がいわば義務教育化してきたことと、一方高等学校ならびに中学校の設備充実ということ、この両者の矛盾に会って思慮に苦しんだが、大学を持たざる高等学校の存在は変則であると判断しました。

高津 資金面ではより十分ではないが、何とか初志を貫徹したいと意気こんでいました。在学生は勿論御父兄や卒業生その他からも強い要望の声がありました。

大久保 創設後の、主として経理面についての問題はどうでしたか。

高津 大体目算はできていました。

村木 御父兄の御要望が何よりも力強い支援であり、卒業生の皆さんからも断行の希望が強かったのであります。

大久保 短大設立準備委員の委員長は理事長高津先生であり、副委員長である河村先生は当時高等学校、中学校の校長という御重責にありながら、一切の私事を擲って東奔西走、総指揮に当られ、同じく副委員長の佐藤文治先生は、一応校長職を御健康のため辞されましたが、主として教員組織の難問に取り組み、現中学校長の土井先生は短大校舎の建造に日夜細心の企画を試みられ、村木先生は難渋な土地問題に一日も速き解決をと努められました。その他、備品関係、会計関係など実に多数の学園先生方のお力が結集され、「人の和」によって不可能が可能となりました。側で見えておりました私は、ただ頭の下る思いで、ここに羽衣学園の強さをつくづく感じ取りました。このお蔭で、ただ今は第10期生を迎え、文学科英文専攻、文学科国文専攻、家政学科被服コース、家政学科食物コースの4科、第1、2学年を合わせて

6百名の学生を収容していますし、教員数も専任、非常勤講師を合わせて70名という世帯であります。この3月で卒業生も2千名になりましたのも、学園内外の大きな力の賜と考えています。次に制服と寮につきまして一言お願いします。

佐藤 本来、本学の制服は学生側の要望からできたものだが、今日制服という問題は、なかなか難しい。やはり羽衣短大の一つの大切な象徴として存続させたいと念願します。

村木 寮は管理面にこれまた困難が伴うけれども、種々の条件がそろえば、各地の優秀な学生を集めて、それぞれ切磋の場を与えるのもよいと思います。

河村 今後、時とともに動きが目立ってくると考えるが、「機すでに熟せり」と判断して、創設に当たった一人として、大きな発展へ志したいと決意しています。

村木 短、高、中はあらゆる意味で三位一体となり、互に相戒め、相励まして、この10歳の短大を立派に成長させたいと願っています。

大久保 種々の御都合で、本日は四先生のみのお集まりに止まりましたが、御協力を仰ぎました各位に対して衷心より深謝いたします。



本誌のための短大関係者座談会 (昭48.10.1)

『写真と座談でつづる 学園五十年の歩み』より

{この対談は、S48年10月1日、羽衣学園50周年を迎えて、行われました。}

四大設立ヒストリー

四年制大学設置認可への道のり

羽衣国際大学 事務局長 清水 明 男

濱下会長より、50周年記念誌に四年制大学開学時のことを振り返って原稿を記すようにとのご依頼をいただきました。羽衣国際大学の設置については、私自身羽衣学園に入職して間もない時期であり、直接設置申請業務に関わっておりません。設置認可に苦勞された諸先輩方に適任の方がおられることと思いますが、諸先輩からお聞きしたお話を元に、私なりに当時のことを記すということでお許しいただきたいと思ひます。

振り返ってみると羽衣国際大学が文部科学省からの設置認可を受けたのは平成13年（2001年）のことで、今年で15年目になります。四大化を推進された中心的な先生方（岩崎照雄先生、片岡幸彦先生、両角英郎先生、清水明廣副理事長、布川嘉祐法人事務局長、山田奨大学事務局長など）はいずれも既にご退職になりました。私事ですが、私は設置認可前年の平成12年（2000年）に羽衣学園短期大学に入職いたしました。当時既に、短期大学を四年制大学へと一部改組轉換することは既定路線となっており、設置認可に向けて連日さまざまな設置準備に関わる会議が夜遅くまで開かれていました。私はそのような会議に出席する立場にありませんでしたが、当時の大学事務局長の山田奨氏や山田氏を補佐する辻中千景さんの近くで仕事をしておりましたので、大変な事務作業量をこなされていることが傍目からもよくわかりました。大学設置の事務作業がいかに大変なことであるかはその後、設置認可申請に関わった教職員の皆様から折にふれて聞く機会があり、認可申請に関わる過去の書類を見るにつけ膨大なエネルギーが費やされてきたということがわかります。

四年制大学の設置認可に至る道は決してなだらかではなく、いくつかの乗り越えなければならない課題がありました。

その第一は財務上の課題です。大学の設置には法令に定められた設置経費を準備する必要がありますが、当時の学校法人羽衣学園には財務上の余裕がありませんでした。通常であれば認可が極めて困難な状況でしたが、同一法人内の学校部門間での調整や、土地の売却、寄付金募集などによりなんとか財務上の課題をクリアしたと聞いています。四年制大学設置のための寄付金募集では当時の理事や大学教職員はもちろん、卒業生団体である美羽会や保護者会からも多大の協力を頂き、二億円余りの寄付金を短期間で集めました。

第二の課題は、これも財務上の課題と関係がありますが、短期大学の一部改組轉換、一・三同時開学という手法で立ち上げなければならないという制約があったことです。羽衣国際大学の設置は、羽衣学園短期大学の国際系学科（国際コミュニケーション学科）と文学系の学科（文学科）を改組し、産業社会学部産業ビジネス学科を設置するという構想で、家政系の学科（人間生活学科）は短期大学として存続させる計画でした（3年後には羽衣国際大学人間生活学部へと改組）。このような一部改組轉換の認可の条件として、改組する元の短期大学の教員はすべて四年制大学に移さなければなりませんでした。移動元と移動先の学部・学科の性格が異なるため、構成員が教学上の理念や目標を共有化するのは容易ではなく、設置を推進する執行部の、時に強引とも受け取られかねない強いリーダーシップが必要であったことと思ひます。また、当時の財務状況から完成年度まで最短（2年間）を目指す必要があり、短期大学の2年生を四大へ3年次編入させる「一・三同時開学」を軌道に乗せる必要がありました。短期大学の先生方の熱心な働きかけもあって、羽衣国際大学開学の年には、100名を超える短期大学生が羽衣国際大学に編入学し、無事2年間で完成年度を迎えることができました。

第三の課題は、学校法人羽衣学園全体が一致結束して四年制大学を立ち上げられるかという課題です。当時、羽衣学園高等学校・中学校の教職員は、必ずしも四年制大学の立ち上げに賛成ではありませんでした。もともと、校地が隣接しているにもかかわらず、短大と中高の交流は非常に少なく、中高は積み上げてきた資金（校舎の改築など将来に備えた積立資金）を四年制大学の設置のために使うことには大反対でした。これらの資金は、5カ年計画で元

に戻す予定でしたが（設置後計画通りに戻されました）、当時は法人内での四大設置にかかわる軋轢が相当あり、執行部はこの点でも法人内での理解、協力を得るために説明、説得を重ねなければなりませんでした。

以上のような、様々な課題や困難の中で、四年制大学設置認可へとこぎつけられたのは、四大化への課題を一つひとつクリアした当時の教職員の粘り強い努力によるものだと思います。文部科学省より求められる基準は、財務、人事、校地などいずれにおいても今日よりはるかに厳しいものであり、霞ヶ関に行くたびに新たな宿題を抱えることとなり、文部科学省の担当者からは時に申請の取り下げを示唆されることさえあったと聞いています。それでも四大設置準備室（後に推進室）を中心に当時の大学教職員が「四大化を行う最後のチャンス」と考え、容易にあきらめなかったことが羽衣国際大学の設置認可に繋がったものと理解しています。

四大の設置には、もう一つ忘れてはならないことがあります。それは、羽衣学園短期大学同窓会美羽会が果たした役割です。1964年以来短期大学としての長い歴史があり、特に改組される文学科については多くの卒業生を輩出してきた伝統があります。このような歴史と伝統のある短大の改組轉換には、同窓会からの強い反発、反対が予想され、四大化の推進には、短大卒業生の理解と協力が不可欠でした。そのような中、濱下美羽会会長は、執行部の話に丁寧な耳を傾けながらも、卒業生が四大化を心から受け入れられるよう常に卒業生への目配りを忘れず、母校の良き伝統はしっかり受け継ぐことを条件に、大局的観点から物心両面で四大設置に理解と協力をさせていただきました。美羽会が、四大化にあたって多額の寄付を行い、卒業生から応援が得られたことは、困難を極めた四大設置において大きな弾みとなりました。

以上のように、教職員、関係者の多大な努力と協力があって羽衣国際大学は設置認可されました。羽衣国際大学の設置趣旨には、実学主義、国際主義、地域との連携が記されておりますが、これは現代日本の高等教育においてますます重要な課題となってきています。今日私たちはともすれば先人の苦勞を忘れがちですが、井戸を掘った先人への感謝を忘れず、15年前に播かれた種をしっかり育て、羽衣国際大学を発展させて行くことが私たちの責務であると思ひます。



ご挨拶

美羽会 会長 濱下 恭子

50周年を迎え、今日まで皆様より温かいご支援ご指導を賜りましたことを心より感謝申し上げます。2015年は、日本におきましても阪神淡路大震災後20年、戦後70年と記憶に留めておかなければならない出来事の節目の年でもあります。私達が戦争を経験することもなく平和で自由な環境下で短大や四大で学ぶことができましたことは、誠に幸せであったと思います。

短大初期に入学された皆様は、泉州の名門羽衣学園の教育文化から生まれた品格や伝統が持つブランド力に魅力を感じ入学されました。制服は1期生が考案した他大学とは全く異なった千鳥格子の制服で通学しておりました。開学当時は、23才が結婚適齢期ということもあり、社会も女性が外で働くことに理解を持ち合わせていない時代でした。母校の教育は専門分野だけでなく教養の分野にも力を注いで下さっていたように思います。文系には後に名を残された先生方にご指導を頂き、現在も先生方の教えを学び続けておられる方もいらっしゃるようです。

時代が移り、バブル期後半には私達の第一次ベビーブームの子女がキャンパスを埋め、いつの間にか制服は着用されなくなり、華やかなファッションで溢れた大学を訪れるたびに、主婦の私達はただただ圧倒されておりました。

1985年に雇用機会均等法が定められ、企業では寿退社も減少し、女性の社会的地位が上昇すると共に、四年制大学を目指す女生徒も多く、母校も時代の流れに乗じるように、男女共学、四大に改組そして留学生の受け入れという目まぐるしい時代に入りました。

同窓会も新しい風を受け止め、様々な難しい決断を下しながら母校との共存の道を歩んでまいりました。その結果、中国支部も誕生し恩師と共に大連、天津に2度訪中いたしました。

そして50周年を迎えた今年、美羽会も世代を越えた交流の時代に入り、活躍されている社会や、価値観も異なる人達が共通の意識を持って集える機会も少なくなって

おり、50周年という記念すべき年こそ恩師や友を想い、集まって頂くことを願って春の部「オセロ」、秋の部「川淵三郎氏講演」を企画いたしました。他大学に比べ同窓会の規模としては小さいですが、母体の羽衣学園の同窓会らしさが皆様に伝わればという思いで3年かけて準備してまいりました。

思えば、ゲストも私達の力では到底出演が叶わない方々を、学術顧問の川淵三郎氏と辰巳満次郎氏のお力添えにより実現することができました。また、学校法人羽衣学園松井理事長の「協力してあげてください」の一声を頂いたおかげで学園をあげてのご協力が叶いました。羽衣ファミリーの皆様のご尽力は、後に続く美羽会の人達にも伝えて参りたいと思います。

私の役員生活38年の中でも24年間の会長時代は、予測を超える事態を前にして紆余曲折の道のりではありましたが、いつの時代も共に手を携えて下さった役員の皆様、そして多くの先生方に知識を授かり、学生の皆さんには前向きに学ぶ力を頂いて参りました。50年の間、光や水を与えて頂いた美羽会の木は、大きな幹となり、立派な枝を伸ばしております。

これまでの私の中の美羽会の時間は人生の何ページを占めるのかはわかりませんが、美羽会という木を成長させるために多くの皆様より頂いた養分を吸収し、成長させる土壌であったと思います。

今後のさらなる会の発展の為、皆様のご理解ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



「美羽会 50周年によせて」

学校法人 羽衣学園
理事長 松井 基純

美羽会五十周年誠にありがとうございます。

お祝いと心から感謝を申し上げます。

人生の縁というのは不思議なもので亡き母が愛した出身校で今年79歳を迎えその3分の1の30年近くを羽衣学園に関わっております。

島村育人先生を始め諸先輩達が築き上げた本学が90有余年を迎え思い出の記念行事を挙げていただいた事は歴史の1ページのみならず永遠に語り伝えられるものと思います。

企画の前半のシェイクスピアの『オセロ』は本学の学術文化顧問であります辰巳満次郎氏と狂言の野村萬斎氏による能と狂言を融合させた素晴らしい舞台で、会場となりました講堂があふれんばかりの観客の拍手で幕を終え、地域社会をはじめ関係者の心に大きなインパクトと喜びを与えていただきました。

また昨年11月の式典に際しましては若手能楽師による『羽衣』が演じられその一節に卒業生である亡き母を思い出し涙が溢れて参りました。式典の記念講演では、濱下会長の先見の明か、時を同じくして文化功労賞を受章されました川淵三郎氏をお迎えしてご講演を賜り式典に錦上華を添えて頂きました。本学の学術文化顧問であり奥様も羽衣学園出身という事で喜びを分かち合う事が出来、厳粛な中にも楽しい時間を共有させていただきました。

羽衣学園短期大学から始まりました同窓会『美羽会』を羽衣国際大学へとまとめ上げられました会長様を始め役員の皆様には心から感謝と敬意を申し上げたいと思います。美羽会50周年を契機に今後ますます隆盛にご繁栄を重ねられます事を心からご祈念申し上げますと共に、羽衣学園短期大学及び羽衣国際大学の卒業生の皆様が、世界中を舞台に活躍され、日本のみならず、各国に美羽会支部が誕生されまことを期待し、ご挨拶とさせていただきます。



「美羽会」の50周年を祝して

羽衣国際大学
学長 岸本 幸臣

羽衣学園短期大学・羽衣国際大学同窓会「美羽会」の設立50周年を、大学を代表して心からお慶び申し上げます。昭和41年の第1期卒業生以来の半世紀は、高度成長とオイルショック、バブル経済とその破綻など経済の変動期でした。また受験市場でも、ベビーブームと大学進学ブーム、少子化と大学大衆化と言う浮き沈みの激しい時代でした。

「美羽会」に結集された卒業生のみなさんは、まさにこの時期に短大・大学で学ばれ社会に巣立られました。社会や生活についての価値観や行動様式が大きく揺れ動く中で、みなさんは、職業生活・地域生活・家庭生活の場で、羽衣学園で学ばれた「愛真教育に基づく、自由・自主・自律の個性尊重の人間教育」の成果を揺るぐことなくしっかりと発揮され継承されてきました。それが今日の羽衣国際大学の力強い支えとなり誇りとなっております。

4年制大学としての歴史は10年余りと短いですが、それでも南大阪に於いて本学の存在が目されるのは、「美羽会」のみなさんのこうした堅実な実績の積み重ねがあつてのことだと感謝しております。「羽衣の卒業生なら期待できる」の評価を、卒業生のみなさんが、実社会で立派に証明してくれたからに他なりません。羽衣へのこの評価は「美羽会」のみなさんが、後に続く後輩達に指し示してくれている大切なメッセージだと受け止めております。「美羽会」の更なるご発展を心から祈念して、お祝いの言葉と致します。



美羽会設立50周年に寄せて

公益財団法人日本サッカー協会 最高顧問
公立大学法人首都大学東京 理事長
学校法人羽衣学園 学術文化顧問

川 淵 三 郎

羽衣国際大学・羽衣学園短期大学同窓会「美羽会」
設立50周年おめでとうございます。

昨年は、貴会50周年記念式典にお招きいただき、関係者の皆様と楽しいひと時を過ごさせて頂いたことに改めて御礼申し上げます。

さて、私は縁があって、現在、公立大学法人首都大学東京の理事長として大学の運営に関わっています。日々、学内外でいろいろな人と話し議論しておりますが、学校運営において、最も大切なことは、学生の学ぶ意欲と熱意に応える舞台をしっかりと創ることだと思っています。これからの社会は、高度情報化、グローバル化がさらに加速度を増し、とりわけ日本ではこれまで経験したことのない少子高齢社会が到来しようとしています。日進月歩というだけでは足りない変化の激しい時代に、これからの日本社会を支える人材の育成は、すべてに優先する課題だと思います。たとえ、これまでの常識に反することであったとしても、この使命を果たす上で有効と信じるならば、時に発想を180度転換してでも果敢に取り組まなければなりません。私はこれまでJリーグチェアマン、日本サッカー協会会長、そして日本バスケットボール協会会長として様々な経営判断をしてきましたが、常に判断の基準としてきたことは、プレイヤーズファーストということです。これを大学に当てはめればスチューデントファーストということになります。

大学時代は、恩師との出会いや、国内外の友人との切磋琢磨を通して、その後の人生における基盤、物事に取り組む基本姿勢というものを養うべき時です。それは生涯にわたって困難な中でも諦めず、仲間とともに夢を実現していこうとする能動的な姿勢と言い換えることができます。そのような姿勢を身につけて大学を卒業したみなさんが社会で活躍するというのが、その教育機関の社会的評価となって行くのだと思います。そして、社会人となった卒業生が重要なステークホルダーとして、さまざまな場面で母校を支援し、後輩を応援することは、その大学の良き伝統を育むことにつな

がります。その点で同窓会の果たす役割は非常に大きいものがあると言えるでしょう。

美羽会は、これまでも濱下会長のリーダーシップの下、卒業生のみならず在学生のためにさまざまな活動に取り組まれてきたとお聞きしています。50周年の節目を迎えて、同窓会美羽会が、ますますその活動を活性化して行かれることを切に願っています。

平成28年2月1日



東京オリンピックでアルゼンチン戦に出場しゴールを決めてベスト8が決まった。



祝辞 50周年に寄せて

能楽シテ方宝生流。羽衣国際大学日本文化研究所客員研究員
羽衣国際大学能楽部指導 平成23年度・24年度文化庁文化交流使
重要無形文化財総合指定保持 学校法人羽衣学園学術文化顧問

辰巳 満次郎

美羽会50周年、心よりお祝い申し上げます。また、その歩みと御活動を丁寧にご綴る記念誌が発刊されますこと、誠に意義深くお慶び申し上げます。

記念事業につきまして存じ上げる中には、バラエティに溢れ、充実した内容の数々、その準備や運営には皆様さぞ大変であられたと容易にお察ししますが、一丸となられて進まれた統率力、組織力にも驚かされるばかりで御座います。

特に私の関わらせて頂いた羽衣学園講堂での「新作能オセロ公演」は、私の知る限り前代未聞とも言える同窓会イベントとして、更には能楽界でも話題になったほどです。学校の同窓会周年行事で新作能を開催なさること自体に勿論驚いたのですが、最も感動しましたことは微細にわたる御心のこもった「オモテナシ」の数々。これは濱下会長を中心とした美羽会様の精神性の賜物であると存じます。

私共は舞台公演でお客様をお迎えする専門家であるのに、そのプロフェッショナルではない美羽会様の熱く直向きで、しかも行届いた運営・サービスを目の当りにし、根本的な精神を改めて思い出させて頂いた次第です。まさに「限りを盡した」オモテナシ、美羽会、羽衣の素晴らしさを知って頂く為にも大変有意義なイベントになったと思います。出演者達も深い感銘を受け、いつまでも心に残ることでありましょう。

抑々私が美羽会様と御縁を頂くようになったのは、羽衣国際大学日本文化研究所(泉紀子所長)の客員研究員として新作能「マクベス」の制作・演出・主演を担当致しましたことを切っ掛けに、大学内での学生クラブと、卒業生や職員といった美羽会メンバーを対象とする社会人クラブの実技指導を務め始めたことに因ります。

クラブには、日本文学や古典芸能に興味を持つ学生、日本文化をより深く知ろうとする留学生、そして日本文化に触れて、それを大事に守ろうとして下さる美羽会の方々と、他大学には見られない多彩なメンバーでの構成となりました。

そこには一種のコミュニティが生まれ、若者が人生の先輩たちと共に学び、ある時は色々と教を乞うという佳き時代の触れ合いがあります。そしてそれは期せずして生まれた反応ではなく、能楽クラブ設立に於いて狙われた姿であったのでした。その心深さにも胸を打たれましたが、教育の現場では、もっと増えても良いケースではないかとも思います。

最近では日本を訪れる外国人が飛躍的に増えており、主たる目的は日本文化を観に来ている訳ですが、果たして日本文化を語れる日本人が、若者が、如何ほどいるでしょうか。逆に、日本に来た留学生や観光客は悉く自国の文化を語ることができます。羽衣国際大学は留学生も多く、その中には日本文化に興味を持つ学生が大多数、学内に於いて国際交流が出来ることは素晴らしいことですが、さらには日本人学生が留学生に日本文化を語れる人間になってもらいたいものです。

美羽会の本来の精神を益々広めていただき、美羽会准会員でもある現役学生諸君にも芽生えさせてもらいたいと願います。

やがて来たるオリンピックには、日本を観に来る外国人で賑わうでしょう。喜ばしく待ち遠しい事ではありますが、これこそ開催誘致にも大きな意味をもった「オモテナシ」が大事になります。本当のオモテナシとは日本を皆が語れることから生まれると思っております。つまり日本人が試される時なのであり、現状ではポリシーの厚みに対して大きな危うさを感じてしまいます。

古来より、『文学廢れば花も匂い無し』と申します。文化の花の香ゆたかならん事を願います。

羽衣国際大学内の文化交流に於いても美羽会の精神性が広まりますように、今後とも力強い存在で居てくださり、益々ご発展なさいますことを、心より祈念しております。そしてこの記念誌を手にとられた「旧雨今雨」の会員ご一同に尊敬と期待の念をいただきつつ、お祝いの辞とさせていただきます。



美羽会 50周年に寄せて

羽衣学園中・高等学校
校長 馬場 英明

美羽会の創立50周年を心からお祝い申し上げます。

一口に50年とは申せ、半世紀という年月であり、その時間の重みは計り知れないものがあると思います。同じ学園ですので、本校から羽衣学園短期大学・羽衣国際大学へ進学するというのは自然な流れで、本校出身者の美

羽会会員は本当にたくさんいらっしゃると思います。実は私の妻も美羽会の会員でしたので、毎年会報を見させていただいておりました。

その活動を拝見して、いつも感心する事が二つあります。一つは、学生や留学生に対する支援が実に細やかで行届いていること。他の大学のことはよくわかりませんが、これほど直接学生と関わる形で活動されている同窓会があるのでしょうか。朝食抜きでは学業にも熱が入らないと、ワンコインで食べられる朝食の提供を支援したり、心細い思いをしている留学生に対し、交流会や日本語弁論大会を開催し居場所や活躍の場を作ってあげるなど「母の愛」を感じてしまいます。二つ目は、ご自分たちの活動も相当レベルの高いところで、しかもそれを楽しんでおられる。その最たるものが、昨年行われた「オセロ公演」だと思いますが、する以上は本物を追求して真剣に取り組んでこそ、本当の楽しさを手に入れることができる、という大人の楽しみの醍醐味をよく御存じだと唸らざるを得ません。

これからの美羽会がどのような活動をされるのか、また発展していくのか、目が離せません。

美羽会が、今後60年100年と続き、これからどんどん増える男性会員を巻き込んで益々発展されることを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



美羽会創立50周年祝辞

羽衣学園法人事務局長
木原 一仁

美羽会会員の皆様、濱下会長を始め役員の方々及び歴代の役員の皆様方、美羽会創立50周年心から喜び申し上げます。

美羽会とは、私が羽衣学園短期大学に入職した最初の担当部署が学生課で、その後会計課に異動しましたが、両部署とも美羽会とは関係が強かったことから以降

35年間に亘って関係を持たせていただけてきました。

振り返ってみますとこの間の同窓会活動は順風満帆に進んできたのではなく、むしろ荒波のなかを必死に掻い潜って今を築かれてこられたと思います。

その一つの例として思い当たるのが、今でこそ地道な努力の結果、近隣大学の同窓会誌に負けないまでにブラッシュアップされた「同窓会誌 美羽」ですが、初版発行当時の「会報誌」作成に当たっては、相談を受ける中で思わず、「二度と新聞づくりができなくなるが、そこまで揉めるなら、発行など止めてしまえ！」と怒鳴りつけたことが頭の中に鮮やかに甦ります。

平成10年頃から始まる短期大学の組織変更等で、濱下会長や役員の方々を最も悩ませたのは短期大学への男子学生や留学生の受入れ、平成14年4月の羽衣国際大学の開学及び羽衣学園短期大学人間生活学科の4年制大学への改組転換による短期大学の閉鎖という事業計画を知らされ、さらに金銭的支援を求められた時だと想像します。羽衣学園短期大学の同窓会組織としての「美羽会」の存在母体を失くし支援をするのですから、理屈では解っていても、美羽会員と学園の間であつてどのように伝え、何を申し入れすれば良いのか、羽衣国際大学の卒業生との関係は等、本当に心を痛められたことと思います。

そうした中、濱下会長を始め役員の方々は、大きなアガペの愛で快く羽衣国際大学卒業生を迎え入れると同時に新たな組織作りを推し進め、留学生への目配りや交流を図る中で彼らの信頼を得、日本国内(東京支部)だけでなく帰国した留学生の支援を得て海外支部も2ヶ所(天津・大連)設置されるまでになりましたその行動力には敬意を表します。

羽衣国際大学の各種事業におきまして毎年、積極的なご支援・ご助言と在学生に対する配慮を頂き感謝すると共に、学園運営に携わっている我々も勇気づけられています。

改めて「美羽会」創立50周年を心からお祝い申し上げますとともに今後とも「美羽会」と「羽衣国際大学」が共に成長し益々発展することを祈念いたします。



「美羽会50周年に寄せて」

羽衣学園短期大学国際コミュニケーション学科 元教授
羽衣国際大学 副学長
現代社会学部長 教授
吉村 宗隆

羽衣学園短期大学・羽衣国際大学の同窓会組織である美羽会が設立50年の記念すべき時を刻むにあたり、羽衣学園に身を寄せる一人として慶びにたえません。この半世紀にわたる卒業生のご活躍と、この間一貫して活発に行われてきた同窓会活動に心から敬意を表します。

さて私が羽衣学園に着任したのは平成8年であり、女子短期大学の最末期にあたります。以降短期大学は、共学化、4大化、2学部4学科体制へと改組され躍進していくことになりました。このような激動の時代に本学園で教育の一端を担えたことは一大学教員として大変貴重な体験となりました。特に留学生教育に携わる機会を得たことは、ともすれば単調となりがちな教育活動に大きな刺激となりました。

グローバル化が日常のものになりつつある昨今、本学園は留学生教育という点では時代に一步先んじるものがあったものと思います。海外で活躍する元留学生を含めた卒業生各位のさらなる飛躍と、それを支える美羽会の飛翔とをあわせて祈念するところです。



スポーツホール



羽衣最強の応援団「美羽会」 50周年を祝して

羽衣国際大学 事務局長
清水 明男

羽衣国際大学・羽衣学園短期大学同窓会美羽会50周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また、日頃より、羽衣国際大学への力強い応援を頂き、感謝申し上げます。羽衣学園短期大学の伝統を引き継ぎつつ、12年前に羽衣国際大学が開学いたしました。美羽会は、この大変動期に、同窓会として羽衣精神を4年制大学へと引き継ぎ、常に母校の発展を願い、「羽衣」卒業生・在学生の紐帯となる活動を展開されてこられました。ある意味で、もともと「羽衣」らしさを体現しているのが美羽会と言えるのではないのでしょうか。

大学の存在意義は、学生が、その大学でいかに充実した学生生活を送ることができるか、に尽きると思います。教育面ではもちろん、制度面、施設面など学生生活をサポートする様々な要素を充実させていくことが私たちの課題です。どうか今後とも私たち教職員の最強の応援団として、叱咤激励を賜りますようお願い申し上げます。



レストラン



美羽会 50周年に寄せて

羽衣学園短期大学 元学長
羽衣国際大学 元副学長
羽衣学園短期大学 人間生活学科 元教授
羽衣国際大学 人間生活学部 食物栄養学科 元教授
羽衣国際大学 名誉教授

日野 多賀子

美羽会設立50周年、まことにおめでとうございます。
振り返りますと、羽衣学園短期大学同窓会として発足
された美羽会は、これまでに短大の男女共学化、4年制

大学の設置などの大きな岐路を何度も経験してこられました。何より大きなことは、
2006年に41期生の卒業をもって羽衣学園短期大学が閉学に至ったことだと思います。

短大は18歳人口の減少などの逆風を乗り切るため、学科の名称変更や改組転
換等を余儀なくされ、その布石の上に羽衣国際大学を開設するという激動の時にあ
りました。

当時の学長として、社会に15,516名の卒業生を輩出した短期大学への惜別の
念は筆舌に尽くしがたいものがありました。短大の将来を発展的な形で未来につな
ぐことを実現するためには、止むを得ない選択であったと今も思っています。しかし
短大同窓会の方々にとって、母校への深い思いはひとしおであったことと推察してお
ります。

短大の男女共学化、大学開設、そして短大閉学に際しても、美羽会は大学の
方針を受け入れ、短大・大学の卒業生が一体となった同窓会として継続し、このた
び創立50周年という節目を迎えられたことは、喜ばしい限りで心よりお祝い申し上げ
ます。

この間の大学への理解・協力と多大の貢献はすばらしく、留学生のための海外
での同窓会開催の取り組みや東京、和歌山など各地での同窓会開催と活発な活動
に接してきて、関係各位の決断力や行動力、熱意にいつも感服しています。

今後も卒業生のルーツとして、母校の温かさに満ちた同窓会として、羽衣国際大
学と共にいっそう発展されますよう祈念し、あわせて美羽会会員の皆さんのますます
のご健康、ご幸福をお祈り申し上げます。



美羽会創設50周年おめでとうございます

羽衣国際大学 元学長
羽衣学園 元理事
羽衣国際大学産業社会学部 キャリアデザイン学科 元教授
三村 正治

美羽会50周年おめでとうございます。

このことは卒業生の皆さんの母校を愛する気持ちと歴代
の会長さん役員の方々の同窓会を支える献身的な努力と
があっただけでなされた結果であり、大変おめでたい貴
重な記念碑であると心からお祝い申し上げます。

私は羽衣学園短期大学が四年制大学に改編するに先立ち男子学生を受け入れ
た2000年に教授として就任しました。それまではある都市銀行とその関連会社の総
合研究所の国際本部で中国経済・中国地域学、中国進出企業経営の研究並びに
コンサルタントをしていましたが、ちょうど本学の第二の誕生である四年制大学に向け、
羽衣短大の赫々たる伝統を受け継ぎ、準備が走り始めたころでした。それまで担任
する学生や担当講座を持った経験もなかつた私が短期大学二年間を経て四年制大
学教授の仕事にスムーズに入っていくのは美羽会の存在が大きかったと言えます。
学内はまだ短期大学のころを懐かしむ雰囲気残り、一方で学生たちは四大の体制
にまだなじまず浮足立っていたそのようなときに、美羽会はそれまでの短期大学卒業
生に加えていち早く四大卒業生を見据え一つになった「同窓会・美羽会」を標榜して
いたのです。これは我々四大教員が、出口で笑って卒業できるよう学生たちを鍛えれ
ば彼らが羽衣ファミリーとして認めてもらえるという証しなのだと思います。

私が顧問を務めたサッカー部の対外試合会場で応援に駆け付けた美羽会会長や
役員さんに何回もお会いしたことなど、4大の学生を認めたいという同窓会活動として
高く広い視野がないとできないことだと思いました。

その後本学には教授、学部長、学長、客員教授として13年間在籍しましたが、
美羽会の存在が新生羽衣国際大学に緊張感と安心感と使命感を常に与えてくれ
ているように感じてきました。一例をあげると、留学生の活動支援、中国での同窓会開
催など、日中関係がかまびすしく言われているこの頃ですが、このような無私無欲な
草の根の活動が同窓会としてだけでなく両国民の間に必ずや暖かい心のつながりを
深めていくものと確信しています。

これからも母校になくはない存在であり続けていただきたいと思います。

《羽衣や花満開の晶子の碑 正助》

50周年アニバーサリー

2015年に50周年を迎えるにあたり、2012年春の総会では、単なるお祭りで終わる様な無駄な活動は控えるべきであるという事で、ほぼ白紙状態でした。同じ頃に100年以上の伝統を持つ他大学の同窓会の記念行事に招待され、神戸の大きなホールに満員の卒業生が集い、バロック音楽に耳を傾けている様子を目のあたりにし、深く感銘を受け、50周年という歴史を前にして、私たちに託された使命を改めて考え直す事にしました。

『歴史・人・学び』それらを表現し、多くの人達に羽衣学園を、そして羽衣学園短大から羽衣国際大学に進化していった私たちの母校の文化をもって、節目の年にこそふさわしい、後々にまで残る様な催しをするのが、今日まで支えて下さった先人の皆様や支援を続けて下さった方々に対する恩返しをという総意のもと、2012年秋、「羽衣学園学術顧問の辰巳満次郎先生」に、国際大学らしくを念頭に、羽衣国際大学日本文化研究所で制作されたシェイクスピア『オセロ』を用いた新作能を、野村萬斎氏と共演していただくお願いを申し上げました。ご多忙をきわめられる方々に私達の願いが届くかどうか不安な思いでおりましたが、辰巳満次郎先生のご尽力により、快諾を得ることができました。

羽衣学園講堂での4月26日のオセロ公演当日は、無形文化財の皆様のご出演による豪華な舞台で、日本の伝統文化とイギリスのシェイクスピアの作品が、装束・楽器・詞章の全てと日本の古典芸術を代表するものが一体となった舞台を作り、幽玄の美の世界を展開して下さいました。又、講堂のパイプオルガンの演奏も加わり、羽衣学園の舞台ならではの演出をしていただき、皆様に感動して頂くことが出来ました。



秋の部におきましても、「羽衣学園学術文化顧問の川淵三郎氏」に講演のご依頼を申し上げましたが、今日までサッカー界だけではなく、スポーツの普及と発展に寄与され、2020年東京オリンピック・パラリンピックの役員も引き受けておられたり、又、バスケット協会の諸問題解決にもご尽力されている等、多くの重責を持たれておられるので、講演依頼を引き受けて下さるか、時間の経過と共に私達にも焦りと不安が交錯し、祈る思いで川淵キャプテンのお返事をお待ちしておりました。そして、快諾して頂き、卒業生の皆様に、母校に素晴らしい学術顧問が居られることを伝えたいという私達の思いを届けることが叶いました。

50周年アニバーサリーに携わり、皆様に喜んでいただく事、感激して頂く事の重さを改めて考えさせられました。お力添え下さいました関係者の皆様には心より感謝いたしております。「春の部・秋の部」終わってみれば、全ては『お蔭さまにて』という言葉で締めくくる事ができました。この後のページは、多くの皆様のご支援とご指導によって、作ることが出来た記念のページです。

「美羽会50周年アニバーサリー企画・春の部」
「新作能・オセロ」公演プログラム

50周年アニバーサリー春 於:羽衣学園



会長あいさつ

「オセロ」はスバラシイ作品の文章にも句読点があるように、一呼吸することで、次のステージに向かうためのメルクマールとなる土台を作る事と、伝統のある羽衣の持つ文化をこの機会に一人でも多くの皆様を知って頂きたいという夢が膨らんでまいりました。

三年前に、かつての文科系の源流をくむ、羽衣国際大学日本文化研究所が東西の文学と文化を融合させた作品「オセロ」を制作されていました。能という日本の伝統文化を新作能で表現するという興味深い取り組みに感銘を受けました。そして一流の方々に本学の講堂で、公演して頂きたいという今から思えば無謀とも思えるお願いを致しました。その日から大きな夢の実現に取り組む重圧が肩に食い込みそうになりましたが、夢を実現する日を迎える事が出来ました。

おもてなしにマニュアルはございませんが、本日は私達の感謝の思いを込めてお迎えしております。

そぎ落とされた表現で、日本の伝統的美意識を演じられる作品を凛とした空気に包まれながら、皆様の想像力と感性でご鑑賞下さい。

プログラム 第一部オープニング



初顔合わせ (H.25.7.7)

(辰巳満次郎先生、野村萬斎氏、能面師)
学園関係者 於:香里能楽堂)

趣旨

平成27年(2015年)年4月に設立50周年を迎えるにあたり、アニバーサリー特別企画として、シェイクスピアの四大悲劇の一つである「オセロ」を能の手法で公演します。この作品は羽衣国際大学日本文化研究所所長泉紀子教授と羽衣学園学術文化顧問である宝生流能楽師辰巳満次郎(重要無形文化財総合指定保持者)を中心として日本文学、英文学、演劇学、能楽師、能面師の門下からなるプロジェクトチームにより創作されました。この上演の為美羽会は3年の準備を要しました。

50周年記念春の部「オセロ」公演

堺市長 竹山修身様ご祝辞

歴史と伝統を有する羽衣学園、関西有数の同窓会組織「美羽会」は、設立以来活発な活動を通じて会員相互の親睦をはじめ母校の発展に貢献されておられ、会長様、歴代の役員の皆様、会員の皆様方にあらためて敬意を表します。

羽衣国際大学と堺市西区役所は、去年3月学術文化や地域振興、人材育成の面で包括連携をさせていただきました。イベントやボランティア活動など地域貢献活動でも連携事業がさらに発展できるように期待申し上げます。



『難波』辰巳 大二郎



『羽衣』山内 崇生

新作能

地中海・キプロス島を舞台とするシェイクスピア四大悲劇のひとつが、能の手法により美しくも儂い幻想として新たに描かれた新作能



辰巳満次郎 (演出／オセロ)

能楽シテ方宝生流。羽衣学園学術文化顧問。羽衣国際大学日本文化研究所各員研究員。羽衣国際大学能楽部指導。学校教育への能楽実技導入をはじめ、国内外での能楽上演など普及活動や、伝統的な手法による違和感ない新作能の演出・主演も多く手掛ける。平成23年度・24年度文化庁文化交流使。重要無形文化財総合指定保持。



和久荘太郎 (デズデモーナ)

能楽シテ方宝生流。名古屋在住の中学時代に初めて能を見てその素晴らしさを知り、名東高校にて能楽研究部に所属して以来、能の道を志す。佐藤耕司、辰巳孝、辰巳満次郎の指導を受け、東京芸術大学（音楽学部法学科能楽宝生流専攻）に入学。18世宗家宝生英雄の住み込みの内弟子に入り修行、同門会の「涌宝会」を発足する。



野村 萬斎 (イアーゴ)

能楽狂言方和泉流。能狂言の普及に多種多様な活動を行う。舞台、映画、テレビ出演に加え、世田谷パブリックシアター芸術監督を務めるなど自ら演出、監督、企画もこなす。NHK「にほんごであそぼ」では、全国のこどもたちが狂言のフレーズを口ずさむという快挙を為した。重要無形文化財総合指定保持。



福王和幸 (吟遊詩人)

能楽ワキ方福王流。福王流ワキ方十六世宗家福王茂十郎の長男。父に師事。「道成寺」「張良」「羅生門」などを被演。「大阪咲くやこの花賞」受賞。重要無形文化財総合指定保持。

平成27年7月15日発送の「会報美羽36号」により参加者を募りましたが、8月末の集計では余りにも申し込み数が少なく、電話でつながる限り呼びかけました。

50年の歳月は世代により、思うように出席出来ない層もあり、同窓会活動の新たな問題点を産み次世代にむけての改革を促してくれました。

50周年アニバーサリー 秋 於:ホテル日航大阪

オープニング (舞囃子「羽衣」)



地謡 一辰巳大二郎
澤田 宏司
辰巳 和磨



シテ宝生流 一山内崇生
笛 一竹市 学



当日プログラム

受付写真



<第一部>	<第二部>
1. オープニング 舞囃子『羽衣』 シテ宝生流 - 山内 崇生 地謡 澤田 宏司・辰巳 大二郎・辰巳 和磨 笛 竹市 学	1. 花 杯
2. 学歌斉唱	2. 第10回記念「留学生日本語弁論大会」優勝者スピーチ
3. 会女挨拶	3. タイムラベル ゲスト: THE MIGHTY MOUSE Vo.高沢 真里子 G.Vo.趙樹 信 G.Vo.趙樹 明人 Bs.Vo.柏原 雅樹 Key.Cha.若山 裕美
4. 来賓祝辞	
5. 記念講演「勉学 そして スポーツ」 講師: 川淵 三郎氏 (日本サッカー協会最高顧問)	



会長挨拶

24年間会長を続けて来た道にはバリアフリーが施されておらず、男女共学、四大設置協力、留学生対応など手を抜く事が出来ない問題が続き、大変な年もありましたが、気がつけば50周年をむかえました。



50周年事業に際し三年に及ぶ学園の協力に対し松井理事長に感謝状を贈呈。

短大・四大学歌を高らかに合唱

会報美羽

短期大学開学の時代から高度成長期に突入し、世の中は、政治、文化その他あらゆる面で、社会が大きく変化してきました。そんな中、私達同窓会は、1966年に設立したもののほとんど活動することなく、10年が過ぎ、会報1号が発刊されたのは、ようやく同窓会が動き始めた畠中会長の時代です。当初は卒業生で大学に勤務されている皆さんも仕事の後に合流して製作しておりました。当時の役員は子育ての真っ只中で来られる方も少なく前田会長の時代には大学職員の人達の情熱も薄らぎ気づけば会計の松下さん(現顧問)と副会長の濱下さん(現会長)の二人になり会報を廃刊するところまで追い込まれました。暑い夏に2人で家に集まり作られた時代でも、筆を折ることなく続いた会報は、美羽会が恩師や同窓の想いをつなぐパイプ役となり、今日まで続き回を重ね36号まで発刊することができました。いつまでも会報を楽しみにして下さる皆様のお手許に届くことを願っています。

会報1号の発刊から、世情の動きに合わせて、男女共学、四大開学に至る美羽会の歩みをご覧下さい。



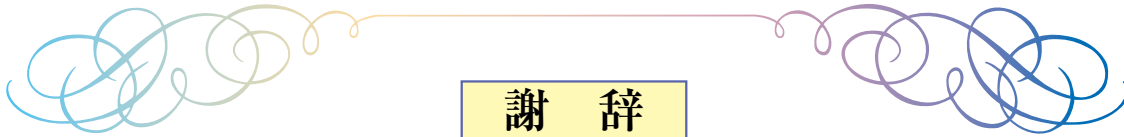
美羽会役員

第4代会長	濱下 恭子	短 3
顧問	畠中 美保子	短 1
顧問	前田 歌代子	短 1
顧問	松下 和美	短 3
理事	大島 満智子	短 2
理事	松川 由紀子	短 13
理事	和田 喜美子	短 7
理事	中口 和子	短 7
理事	南 知 恵	短 13
理事	見通知 行	四 1
理事	阪本 高子	短 26
理事	田口 聖子	短 20
理事	井上 忍	短 18
理事	橋 美千子	四 12
会計監査	町谷 恭子	短 4
会計監査	中村 正代	短 13
国際交流委員	巖 銘	短 34
	(H.26 ~ H.27)	



平成27年度 美羽会評議委員

短大 2期	福井 玲子	短大 37期	見通 祐子	四大 7期	韓 涛
3期	山手 和子	四大 1期	小林 民典	8期	原田 真美恵
4期	久次 千保子	1期	藤下 正毅	8期	向井 静佳
4期	北野 有子	1期	馬野 隆明	8期	下川 純
4期	澤農 政子	1期	廣川 すが子	8期	上田 陽子
6期	和田 中子	短大 41期	岸田 安幾	8期	兪 文琴妹
7期	小門 路子	41期	田ノ岡 磨理(産休)	8期	趙 婉瑩
11期	南川 京子	四大 3期	岡本 昌之	9期	相谷 江里
12期	栗原 敬子	3期	西川 寿彦	9期	渡辺 美幸
13期	南 佐和子	3期	中尾 嶺	9期	田中和 成
13期	大西 幸子	天津支部長 1期	尹 程(海外)	9期	安部 琴美
13期	浜田 千秋	大連支部長 2期	殷 猛(海外)	9期	大貫 正太
15期	宮崎 和子	四大 4期	中嶋 洋介	10期	山岡 愛
15期	一筆 佳子	4期	堀 沙矢香	10期	村上 諒
16期	橋本 敦	4期	永井 麻世	10期	大宅 健太
18期	辻中 千景	4期	陸 劍涛	10期	杉田 亮
22期	松藤 貴久	5期	金澤 明	10期	李 美宣
22期	荒木 信子	5期	内田 聖司	10期	史 嘉佩
24期	文野 真由美	5期	森 雅哉	10期	于 文蕾
26期	田中 和美	5期	韓 亮	10期	隋 永川
30期	野口 貴久美(産休)	6期	篠澤 啓示	11期	中谷 晃大
30期	村尾 真有美	6期	船附 勇太	11期	王 靖淇
30期	余座 滋子	6期	金本 桜	12期	閻 雯(エンブン)
31期	千綿 悦子	6期	中村 吉博	12期	刘 琳(リュウリン)
32期	菊 小百合(育休)	6期	矢野 知里	12期	藤堂 貴伸
32期	杉原 久子	6期	于 顕俊	12期	草竹 悠重
32期	日浦 由季	7期	土井 祐希	12期	籠谷 真理子
35期	寺尾 由花子	7期	福田 麻美	12期	林 沙紀
35期	大早 緑子	7期	清水 真希		
36期	貞松 ゆかり	7期	永尾 隆旭		
37期	小澤 智加	7期	山本 章弘		

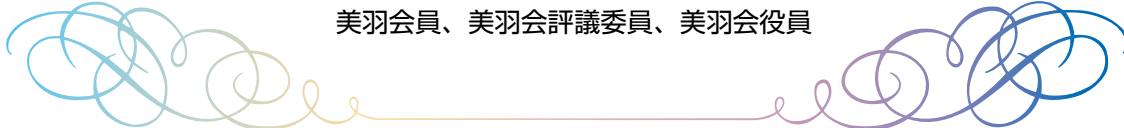


謝 辞

本記念誌に寄稿原稿、写真等のご提供いただいた皆様をはじめ、記念誌製作にご協力いただいた方々、また、50年間同窓会活動にご尽力いただいた全ての皆様に心から感謝申し上げます。

協 力

学校法人羽衣学園、羽衣国際大学、羽衣学園中学校・高等学校、
恩師、学園関係者、大学職員有志、
美羽会員、美羽会評議委員、美羽会役員



美羽会50周年 記念誌「美羽会50年思い出つづり」

発行・編集 羽衣国際大学・羽衣学園短期大学同窓会
美羽会
大阪府堺市西区浜寺南町1-89-1
TEL/FAX (072) 265-3091

製作日 2016年3月31日
発行日 2016年8月1日
印刷・製本 株式会社 日昭リンク

